



参加者が手掛けた大道具が実際の公演で使用されることで、自らの技術が地域の文化活動に直結していることへの誇りと責任感が育まれた。

将来の進路や地域との関わり方を考える契機になった

特に若い世代は、身体を使った技能や職人仕事の価値に触れることで、多様な職業観を持つきっかけとなった。

#### ②どのように学び合いを取り入れたか

本講座では、経験者と未経験者がともに学び合う構造を軸に据え、「共学」を重視した場づくりを行った。地域のベテラン技術者が講師となり、対話を重ねながら指導

一方的な技術指導ではなく、質問・討議・実演を織り交ぜた双方向の学習が実現した。

参加者同士による協働作業を進める形式とし、互いの得意不得意を補い合いながら実践することで「教え合い」「助け合い」が自然に生まれた。安全確認や作業計画を共有する時間を設けた。作業前後にふり返しを行い、気づきや失敗を共有しあうことで、学びが深まり、技術の定着につながった。

#### ③どのような学びと実践を結び付ける工夫を行ったか

本事業は「講座で学んだ知識・技術を実際の舞台で使う」という点に大きな特色があり、学びが社会につながる実感を得られるように工夫した。

・学んだ技術をすぐに実際の道具制作に応用

図面作成 → 加工 → 組立 → 塗装 の流れを通し、“学ぶ-やってみる-使われる”を一連のプロセスとして体験した。

・完成した大道具を11月の公演に使用

参加者自身が制作した大道具が舞台上で使われることで、技能習得だけでなく「社会的な成果の共有」が可能となった。

・舞台現場でのオペレーションも学べる構造に

製作したものがどのように舞台上で扱われるかを見ることで、舞台製作の全体像理解が深まった。

### 3. 取組の成果（事業計画書に記載した事業の目的・目標をどのように達成できたか。事業を実施してどのような成果があったか。）

事業では、事業計画書で掲げた目的・目標に対して以下の成果が確認できた。

#### 1) 技術の継承と人材育成

初心者を含む幅広い参加者が基本技術を習得し、木工・道具使用・図面理解などの基礎技能が身についた。若い世代の参加で、次世代への技術移転の第一歩となった。

#### 2) 地域コミュニティの再活性化

世代・経験の異なる参加者が協働し、舞台制作を通じた新しいコミュニティ形成が進んだ。地元講師・施設との連携を模索する中で、地域の職人と若い世代のネットワーク、公民館などの公共施設でのワークショップ開催を定期的開催への有用性など、公共施設とのネットワークの広がりなどの可能性が生まれた。

#### 3) 文化と労働の価値の可視化

舞台裏の仕事や技術が可視化され、参加者の中で“支える人”の価値を認識する声が聞か

れた。公演本番で大道具が使われることで、地域へ成果を還元することができた。

4) 創造的で地域に根ざした活動の推進

参加者が作った大道具を公演で使用することで、地域発の創作活動に直接寄与した。

技術講座として新規性が高く、今後の継続開催に向けた基盤が構築できた。

4. 今後の課題と展望（事業がどのように岡山地域の ESD の取組と持続可能な社会づくりの発展・継続につながるか）

【課題】

- ・ 継続的な技術継承の仕組みづくりの不足
- ・ 年1回の講座だけでは技術の維持が難しく、継続的な学習機会の設置が必要。
- ・ 指導者層の確保と若手育成の循環構造の弱さ
- ・ ベテラン講師への依存度が高く、若手講師育成が課題。
- ・ 参加者の安全管理・技術レベルの差の調整
- ・ 未経験者が多いため、今後も丁寧な安全教育が不可欠。

【展望】

- ・ 年間を通しての講座を設置し、継続的学習の機会を目指す。
- ・ 大道具講座を定番プログラムとして継続し、若手舞台スタッフの育成拠点を目指す。
- ・ 地域施設・学校との連携の拡大
- ・ 天神山文化プラザや学校との協働を広げ、教育・福祉・文化の多領域での活用を目指す。
- ・ 舞台製作を通じた「地域の誇りづくり」への寄与
- ・ 舞台制作プロセスへの市民参画を継続することで、岡山市民の文化参加を促進し、「地域文化の担い手」を増やす。
- ・ SDGs・ESDの文脈に沿った体系的学習の構築
- ・ 技術習得だけでなく、持続可能な地域文化や多様な職業観を育むための ESD プログラムとして進化させる。

# ワーク風景



# 本番風景

